

承認不安と現代の若者

小林 琴美

目次

はじめに

1. なぜ承認不安が生じるのか
 1. 1 承認不安とは
 1. 2 個人化による社会の変化
 1. 3 人間関係の変化
 1. 4 価値観の多様化
 1. 4. 1 コミュニケーション能力重視の社会
 1. 4. 2 普遍的な価値観の崩壊
2. 承認不安と若者の現状
 2. 1 若者の友人関係
 2. 1. 1 友人関係の形成と維持
 2. 1. 2 対人評価軸としてのコミュニケーション能力
 2. 1. 3 ひきおこされる問題
 2. 2 承認の対象の狭小化
 2. 3 SNS と承認不安
3. 承認不安と向き合うために
 3. 1 承認不安を乗り越える

おわりに

参考・引用参考文献

はじめに

2008年6月8日正午をすぎたころ、秋葉原の電気街で男が運転するトラックが3人をはねた。男はトラックを降りたのち、殺傷能力の高いナイフで居合わせた通行人を次々に刺した。7人が死亡、10人が重軽傷を負った秋葉原通り魔事件はしばらくの間世間を騒がせた。逮捕された加藤智大は「人を殺すため、静岡から来た。誰でもよかった」「世の中が嫌になった。生活に疲れた」などと供述したという。¹この事件に代表されるように、人を殺めたのち、その対象について「誰でもよかった」と供述する事件が何度も繰り返されている。「誰でもいいから殺したかった」。そんな理由で命を奪われてしまった人々のことを考えると、何ともいたたまれない。なぜ「誰でもいいから殺したい」、そんな考えに至ってしまうのだろうか。これまでこの事件をめぐる様々な議論がなされてきたが、その中で私は犯人の動機について「承認への欲望」を取り上げているものに興味を持った。それは“特定の対象を持たず無差別に人を殺す、その行動の裏には普段の生活の中で他者からの承認への欲望が満たされず、事件を起こすことで自らの存在をアピールする意味合いがあるのではないか”というものだ。また、更に着目すべき点はこの事件の後、彼の思考、行為について共感を覚える人がいくらか存在するということだ。法政大学文学部の越智啓太教授は「『自分は社会に必要とされているのか』と孤独を感じる人が多くなっている」と指摘し「そのような人は、社会に認められようとするのではなく、社会への不満を抱き攻撃的になる場合がある。『自分と同じ』と加藤被告への共感を抱くのだろう」という。²この事件は特異な例ではあるが、ここに共感する人がいることから、大小の差はあれ、こういった類の孤独感や承認への欲望は特異なものではないことが伺える。また、SNSや友人関係を通して現代の若者の承認への欲望、不安を身近に感じ、自らに非常に身近でありながらも、前述したような事件にさえ結びついていく可能性を持つ承認への欲望、またその欲求がもたらす不安感について深く考えてみたいと思い、このテーマを設定した。本論では第一章で承認不安についての定義づけを行い、社会学者であるUlrich Beckの「個人化」理論を参考に近代化にともなう社会の変化に焦点をあて現代における承認への不安が増幅する要因を人間関係の変化と価値観の多様化の二点に着目し探っていく。第二章では承認への欲望や不安に興味をもつきっかけの一因となった現代に生きる若者に焦点を当て、承認への不安がどのように顕在化しているのか、若者の友情関係やコミュニケーションを取り上げ検討した上で、現代に特有のインターネットサービスと承認への欲求の関係についても考察し、その実態や効果についても検討する。第三章では承認への不安が増幅する現代社会においてより効果的な承認

¹ 朝日新聞 Digital 「容疑者「殺すために来た」ナイフで次々」(2008/6/8)

<http://www.asahi.com/special2/080609/TKY200806080098.html>

² 産経ニュース 「秋葉原事件の影響いまも」(2015/2/2)

<http://www.sankei.com/affairs/news/150202/afr1502020023-n1.html>

への不安の緩和はどのようにして可能であるかを模索していく。

1. なぜ承認不安が生じるのか

1. 1 承認不安とは

はじめに、本論で中心的に扱う「承認不安」についての定義づけを行う。「承認不安」というワードを打ち出した山竹は『「認められたい」の正体 承認不安の時代』の中ではっきりした定義づけは行っていないものの、「現代は承認への欲望が増幅した時代、というより承認されないことへの不安に満ちた時代である」（山竹 2011:130）と述べ、「承認されないこと」を恐れるがゆえの不安を指して「承認への不安」＝「承認不安」とし、多くの人々が「承認不安」を抱えていることを示唆している。秋葉原無差別殺傷事件の少しあとから現代における「承認への欲望」に着目した議論が繰り返されるようになったが、後述するように承認への欲望は現代特有のものではない。そこから考えるに、現代において承認への欲望や不安が着目されるようになった要因は社会の側にあると考えられる。つまり、“かつての人々が抱える承認への欲望はそれほど大きなものではなかったが、現代社会に生きる人々は承認への欲望が増幅している”のではなく、承認への欲望は昔から誰もが持っている中で、現代社会では社会側の要因によって他者からの承認が得にくくなり、人びとの承認への不安がつのることになる。第一章ではこの承認への不安を増幅させる社会側の要因を追求していくが、ここで一度、承認への不安が生じる根底となる「承認への欲望」についても確認しておきたい。

承認への欲望は人間の基本的欲求の一つとしてアメリカの心理学者アブラハム・マズローが提唱する人間の基本的欲求五段階説にも含まれている。基本的欲求五段階説において承認への欲求は生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求に続く四つ目の欲求にあたり、より高度な欲求として五つ目に自己実現の欲求があるとされる。マズローは承認への欲求について①「強さ、業績、妥当性、熟練、資格、世の中に対して示す自信、独立と自由に対する欲求」②「他者から受ける尊敬とか尊重と定義できる、いわゆる評判とか名声、地位、他者に対する優勢、他者からの承認や注意、自分の重要度、あるいは他者からの理解に対する欲求」からなる「安定し、基礎の確立した、自己に対する高い評価や自己尊敬、自尊心、他者から尊重されることに対する欲求あるいは欲望」（マズロー1971:100）と定義づける。本論では主に②の他者からの承認を承認への欲望の対象として捉え、論じていく。

褒められること、実力・実績を認められること、それらが喜びにつながることはつまり私たちがみな「承認への欲望」を持っていることを意味している。先に述べたように、このように承認への欲望は誰もが持っている欲望であり、人々が承認への不安を増大させる要因

は社会の側にあると考えられる。ここから、なぜ現代社会において承認が得にくいのかを明らかにするため、Ulrich Beck(1986=1998)の提唱する「個人化」を参考に、近代以降の社会の変化を見ていく中で承認不安が生じる要因を探る。

1. 2 個人化による社会の変化

個人化

本章では承認への欲望にまつわる不安の増加を促す要因を社会構造の変化に見出すべく、Ulrich Beckが提唱する「個人化」(Beck 1986=1998)に着目し、その中でも特に個人化による親密圏における人間関係の在り方の変化と価値観の多様化の二点に焦点をあて検討する。

はじめに、Ulrich Beck 著の『危険社会』、鈴木宗徳編著の『個人化するリスクと社会』を参考に Beck の提唱する「個人化」という現象についてまとめる。

Beck (1986=1998) は近代社会を第一の近代、第二の近代と二分し、「第一の近代」から「第二の近代」へという図式を創り上げた。その中で第二の近代について「再帰的近代」という別名を用い、第二の近代における「個人化」は「再帰的近代化」という社会の根本的变化のなかの一部として論じている。また、第一の近代は工業社会を指し、第二の近代は再帰的近代化の結果生じるリスク社会を指す。つまり、工業社会では科学的進歩の追及が否応なしに「善」とされる社会であり、その結果として現在の社会はリスクに満ちた社会となっている、という図式である。Beck は主としてこの第二の近代における社会の中での個人の在り方の変化を指して「個人化」という概念を用いている。

次に、個人化の定義を確認しておきたい。Beck は第一の近代から第二の近代への変遷の過程において「すべての豊かな西側産業社会において一とりわけドイツ連邦共和国において一、第二次世界大戦後の福祉国家による近代化のなか、前代未聞の射程範囲と力学をもった社会の個人化が始まった（しかも、社会における不平等の関係は、変わらないままで）。すなわち、高い物質的生活水準と社会的保障の推進を背景にして、人間は、歴史的連続性が断絶されるなかで、伝統的な階級による諸制度や家族による扶養から解放された。そして、ますます自分自身に注意を向け、あらゆる危険やチャンスや矛盾に満たされた労働市場における自分個人の運命に、注意を向けるようしむけられた。」(Beck 1986=1998:138)と述べている。

Beck (1986=1998) によれば個人化とは人生が「自己内省的」になっていること、社会的にあらかじめ与えられた人生が自分で作っていく、そして作っていかなくてはならない人生へと変換されていること、職業教育や職業職場や居住地や結婚相手や子供の数等についての決定を、他の些末な決定とともに、行うことが可能だけでなく、行わなければならないもなったことであり、鈴木 (2015) によるより具体的な定義を参考にすれば、個人化とは「家族・階級・企業などさまざまな中間集団から個人が解放されることにより、個人によ

る自己選択の余地が拡大するとともに、これらの集団によって標準化されていた個人の人生が多様化し、失業や離婚など人生上のさまざまなリスクを個人が処理することを余儀なくされるという、一連の現象を表すものである。」(鈴木 2015:はじめにii)このように、近代化の進展と資本主義の発展にともない物質的豊かさが獲得され、生活水準の上昇が実現していくなかで、人びとがかつて拘束されていた共同体や伝統から解放される。解放された個々人はそれぞれ自分自身の人生設計を行う必要性が生まれ、選択、決定の自由を獲得するとともにその代償として自らの選択、決定、行為について責任を負うようになる過程が「個人化」である。つまりかつて個人を拘束していた諸集団からの解放により、あらゆる側面において選択・決定の自由を得ることと引き換えに、個人の人生設計、行動における責任はすべて個人にふりかかるものとなる。

したがって個人化とは、個人のアイデンティティを支えていた中間集団の弱体化により価値観、ライフコースの多様化が進行し、個人にとって選択の自由の拡大と自己決定の可能性を高めた一方で、個人にふりかかるリスクの防波堤となるものを失い、自己の負う責任の範囲が拡大された社会的変化を表す。

第一の近代における個人化

Beck (1986=1998) が主として個人化を論じるのは第二の近代においてであるが、第一の近代においても第一義的な個人化が起こっている。

第一の近代における個人化ではかつて人びとが拘束されていた伝統的共同体からの解放が起こる。近代以前、血縁に基づいた諸氏族で構成された集団からなっていた社会はその解体を受け、領土で区切られた新たな社会が登場する。この過程によって、個人はその仲間たちに類似することがふさわしいとされた集合的存在から個性や自由意志をもつ個人として存在することとなる。(伊藤 2015:30) つまり伝統的共同体からの個人の解放の過程で、かつて伝統的共同体の中で見失われていた「個人」としての人間性、意思があらわれることとなり、社会における個人としての存在感を強めていくこととなるのである。

しかし、第一の近代において、諸集団から解放された人びとはまた新たな別の諸集団へと包摂されることになる。すなわち、「全体社会と個人の間、つまり社会のメゾ・レベルにおいて、新たに、家族、職域(階級を含む) コミュニティといった相対的に安定的な中間集団が登場し、存続していった。」(伊藤 2015:32) つまり、第一の近代においては、個々人が伝統的共同体からの解放を経験しつつも家族や企業といった、かつてのそれらと比較して相対的に小さな、新たな中間集団に所属することとなり、精神的にも、生活を支える経済的な部分でも比較的安定した生活環境の確保やライフコースの設定が可能であった。他方、第二の近代における個人化では個々人はさらなる解き放ちを経験し、第一の近代における個人化とは相違点をあらわにする。

第二の近代における個人化

第二の近代では、第一の近代において個人を支えていた中間集団が力を弱めていく。Beckはこれについて「身分の代わりにあらわれるのは、もはや社会階級ではない。社会階級の代わりにあらわれるのは、もはや家族という安定した準拠枠ではない。個々人が、社会的な生活世界における再生産単位となっているのだ。…個々人が、家族の内外で、市場に媒介された生存保障およびそれと関連する人生設計・組織化の行為者となる。」(Beck1986=1988:141-142)と述べており、第二の近代における個人化では第一の近代においての中間集団にあたる新たな所属集団は存在せず、個々人が「個人」として社会と直接関わりながら自己の人生設計をする必要性が生まれたことを示唆している。すなわち第一の近代における個人化では、解放ののち新たな中間集団への所属が促された一方で、第二の近代における個人化では第一の近代の個人化における中間集団のような新たな枠組みは存在しない。個人のライフコースやアイデンティティに安定性をもたらしていた家族、企業などの中間集団が力を弱めることにより、個々人はより一層「個人」として社会と関わりあうことを要される。つまり「個人と社会の間にあった中間集団の存在意義が弱まることで、個人と社会が直接かかわること」(伊藤 2015:41)になり、これら中間集団や福祉国家は、個々人にとってリスクの防波堤となっていたが、今やリスクが個人に直接降りかかることになる。(Beck 1986=1998)この結果、第一の近代と比較して第二の近代における個人のライフコースはより不安定でリスクに満ちたものとなる。

1986年、ドイツにおいて『危険社会』が刊行され、それから10年ほど遅れて日本でも同様の变化が見られるようになる。金融市場の過剰な流動化が国境をこえて甚大な被害を日本にもたらし、バブル経済の象徴であった金融機関が相次いで破綻した。中高年のリストラや若年層の非正規雇用の拡大が起こり、すべての人びとが安定したライフコースをあてにできるわけではないという認識が広がったのである。(鈴木 2015:4)かつて西洋でみられたものと同様の社会変動が高度経済成長期を経てバブル経済の終盤を迎えた日本でも起こり始め、それは様々な面で日本社会に変化をもたらす。非正規雇用の増加や平均初婚年齢の上昇、未婚率や離婚率の増加などもその一例として挙げることができるだろう。『危険社会』においては第二の近代における個人化による問題として教育、貧困、企業、家族と様々な側面から考察がひろげられているが、本論では第二の近代における個人化のなかでの人間関係の在り方と社会的価値観の多様化に焦点をあて、以下詳しくみていく。

1. 3 人間関係の変化

第二の近代における個人化は、未婚率、離婚率の上昇、正規労働者から非正規労働者への置き換えなどさまざまな一連の変化を孕むなかで、人間関係の在り方にも変化が見られる。

その経緯について、Beckは「伝統的な共住状況や集落構造は、ますます新しい「都会風」の都市集落に取って代わられた。家族を超えて広がる、共同体に強く指向した居住形態や集

落形態の代わりに、社会構成が雑多であることや、近隣・知人関係がかなりゆるやかであることをその特色としてもつ、近代的な大都市集落や小都市集落があらわれた。あらかじめ存在していた近隣関係は、そのようにして破壊され、新たに登場した社会関係や人と人との接触のネットワークを、個々人で選択し、作り、維持しなくてはならなくなった。」(Beck 1986=1998:166)と述べる。かつて個々人に安定性をもたらしていた中間集団の弱体化により、個々人はより自由な意思選択、決定が可能となる一方で人間関係においても自己を中心に据え、自らその関係を創り出す努力が求められるようになったのである。

人間関係に変化をもたらした要素として一点目に、個人化によるライフコースの多様化が挙げられる。ライフコースの多様化は価値観の多様化を意味するとともにそれは人間関係の在り方にも変化をもたらす。鈴木(2015)が指摘するようにライフコースが多様化・個人化することは、人間関係においても、どの関係を選択するかについてそのつど選択を迫られることを意味する。個々人が各々自己の目指すライフコースの追及が可能になったために結婚、離婚、就職、再就職といったライフコースを方向づける活動の在り方が多様化し、それに伴ってこれらは人生を長期的に安定させる力を弱めることとなる。長期的な人間関係の形成・維持を促す要素が多様化することにより、その普遍的な価値観は力を弱め、結果的に関係はつねに壊れやすいものとなる。

二点目に、物的資源の充足により必要に迫られて構築される人間関係が衰微していったことが挙げられる。資本主義経済システムと個人化を絡めて人間関係について論じた石田(2015)は近代社会が資本主義経済システムのもと、人々の顕在的・潜在的欲求を好機ととらえ、その欲求を実現することを目指し様々な財やサービスを提供することで人々の生活の欲求を満たしてきたために、これまで人と人を反強制的に結びつけていた「生活の必要性」が大きく薄れたことを指摘している。日本社会は高度経済成長期を経て、人びとの「生活における豊かさ」を求める欲求に応じ様々な商品、サービスが提供されていくことで、人びとの生活に物的豊かさをもたらした。こういった生活における豊かさの充足は人びとをわずらわしい人間関係からの解放を可能にした一方で、人と人を結ぶ媒体を社会側の要因から個人間の意思決定に譲与することとなった。これについてChambersもまた「社会的関係から個人的関係へ」(Chambers 2015:60)という表現を用いており、社会側が人々を結びつける強制力を失い、人間関係が個人レベルの問題になったことを示している。またこの新しい関係性は外的な要因によってではなく、当事者相互の意思によって取り結ばれるため、それが当事者双方に承認を与え、満足をもたらす限りにおいて存続が可能となる。つまり、生活していくために必要に迫られて構築される人間関係から、関係の当事者間の意思選択、満足度などに基づいて構築される、個人をその主体とした人間関係へと変化したのである。このようにして人間関係が個人を主体として選択的に構築されるものへ変化することにより、人びとはその関係の形成・維持のために相手の心的部分への配慮が必要不可欠になる。互いを結び付ける社会側からの要請が失われたことにより、両者間での関係を成立させ、持続させることができるかどうかは当事者間の意思選択にのみ委ねられるからだ。

人間関係が社会の要請なくして形成・維持されるためにはそこに何らかのあらたな「意味」が必要となる。そこで「親密圏の成立要件としての相互もしくは相手の満足や承認」(石田2015:137)が大きな役割を果たすことになる。強制されることなく、当事者相互の意思選択によって関係が成立するためには、互いの承認やその関係による満足感がなければならない。これは新しい関係性が「双方または一方が望めばいつでも終わらせることができる対等な個人間のある種の契約」(Chambers2006=2015:60)によって成り立つものであり、当事者間の意思のほかに両者を結び付ける接着剤が存在しないため、たとえ一方でもその関係性による利や満足感、承認への不満を有する場合、その関係は一方的な意思選択のみによって簡単に消滅するものであるからだ。

これは個人間のコミュニケーションの在り方に大きな影響を与えることとなる。人間関係の構築や維持について生活のための必要性が弱まり、人と人を結びつける媒体が相互の心理的部分に依拠するようになったため、結果的に人びとは他者との関係構築・維持の過程において相手の心理に過剰に傾注するようになる。山竹(2011)は「家族や仲間関係において相手の愛や信頼に疑いを抱くとき、自分は受け入れられているのかどうか、認められているのかどうか、強い不安に襲われるようになる。そのため、自分の考えや感情を過度に抑制し、本当の自分を偽って家族や仲間と同調し、無理やりに承認を維持しようとする。」(山竹2011:10-11)と指摘する。相手方の承認なしではその関係の維持が困難である状況において、人々はその関係維持のため相互の承認の維持に尽力せざるを得ないのである。しかし、どのようにすれば相手の承認を得られるのかといった確固とした方法は存在せず、自分のコミュニケーションに不安を感じることになる。

多くを人間の心理的部分に依拠する人間関係は不安定であるがゆえに、人びとは人間関係に対し不安を抱え、関係の構築・維持のための相手の満足、承認を得るために奔走することとなる。このように相互の承認がなければ人間関係の構築・維持が難しい状況においては、相手の承認を得られず関係の構築、維持ができないことを恐れるがゆえに承認不安が生じやすいと考えられる。

1. 4 価値観の多様化

1. 4. 1 コミュニケーション能力重視の社会

人間関係の構築・維持において相互の承認が必要とされるために現代では承認への不安を抱える人びとが増えている様子が伺える一方で、現代社会における別の視点からも承認不安が増幅する要因を見出すことができる。萱野(2008)は承認を渴望する人々が増えているのは、現代社会がコミュニケーション重視の社会になっているためであると指摘する。萱野(2008)によれば現代社会がコミュニケーション重視型の社会へと移行しているため、仕事でも私生活でもコミュニケーション能力がますます要求され、他者との言語的、情動的なやり取りのなかで自己を実現していかななくてはならないという傾向がどんどん強くなって

いる。コミュニケーション力が重視される社会のなかでは、コミュニケーション力に長けている人のほうが仕事、友人、異性関係など生きていく上で様々なことがうまくいく可能性は高い。つまりコミュニケーション能力の有無が社会的に承認を与えられるか否かのキーにもなりつつあるのである。

しかし、他者の承認を得られるものはコミュニケーション能力だけではない、にも関わらずコミュニケーション能力ばかりが重視される裏には「普遍的な価値の崩壊」（山竹 2011:23）があると考えられる。「ある行為が多くの人に「価値あり」と認められるのは、その判断の基準となる価値観を多くの人々が共有しているから」（山竹 2011:23）であり、このような多くの人々に共有される社会規範が失われた場合、人々は価値判断の基準を見失い、「価値ある行為」によって承認を得るのではなく自分に身近な周囲の他者に認められることに重点を置くようになる。つまり、自らの軸となる価値観を有さないために、自分の行動の指針となる判断基準を他者からの承認に委ねているのである。それゆえ承認を与えてくれる身近な周囲の人びとからの承認の確保において重要となるコミュニケーション能力が重視されるようになる。では、かつて個人にとって価値判断の基準となっていた「普遍的な価値」はなぜ、どのように崩壊することとなったのであろうか。

1. 4. 2 普遍的な価値観の崩壊

個人化による個人人のライフコースの多様化は一方で価値観の多様化を意味する。第一の近代における個人化においては新たに登場した中間集団によって人びとは相対的に安定したアイデンティティを与えられていた。しかし第二の近代での個人化では個人はさらなる解放を受け、自己のアイデンティティを方向付け、自己の行為への意味付けや再構成を自ら行う必要性が生じてきた。「個人化した社会において、個人は、自分自身の人生行路や能力や立場の認識やパートナーシップ等の関連において、自分自身をその行為の中心として、設計事務所としてとらえることを学ばなくてはならない。」(Beck 1986=1998:267)のである。資本主義の発達に伴い物的資源が拡充され豊かな生活をもたらされたことで個人はそれぞれ自己の価値観に準じて自由なライフコースの選択が可能になった。このためライフコースの統一性は失われ、代わって多様なライフコースのあり方がそれぞれ一つの価値観として相対化され存在するようになる。

自らのライフコースを自己の意思選択によって決定づけられるようになったことに伴い、就職、結婚といった社会で普遍的に共有されていたライフイベントのあり方も多様化し、それまで社会共通の価値観によって抑え込まれていた多様な価値観が姿を現し始める。また、資本主義の発達、グローバル化の進展にともなって国境をこえた多様な価値観の共有がなされ、かつて存在した社会共通の絶対的価値観はその信頼性を失うこととなる。多様な価値観がそれぞれ価値を認められる現代の社会では一般性のある価値や社会で共有される普遍的な価値そのものの信頼がゆらぐ。ゆえに社会規範や社会共通の価値観を自己の行為の価値基準の指標とすることはもはやできない。

山竹（2011）は、かつては伝統的な価値観のなかで個人の役割は固定されていたため、アイデンティティや承認は最初から自明視され、問題化されていなかったが、近代になると、自分らしいあり方が追及され、他者の承認を介してアイデンティティを形成するようになったため、そこに承認の不安が生じてきたと指摘する。社会共通の価値観や社会規範が絶対的な信頼性をもっており、個人の社会的役割が与えられる社会においてはその価値観に則って自らの行動指針を定める。もともと持っている承認への欲望のために人間は他者の承認を求め、社会的に承認されたいからこそ、社会で共有されている規範や価値観を重視し、それに準じて自己の方向性を定める。その社会に生きる多くの人びとに共有されている価値観に準じた行動は周囲から社会的承認を得やすい上、個人は社会の側から与えられた役割に自己のアイデンティティを見出すことができた。一方で、現代ではその社会的承認が与えられる基準となる価値観や社会規範がその信頼性を失い、自己価値を測る基準を見失ってしまうことから承認不安が生じる。

山竹（2011）によれば現代社会は社会に共通する価値基準が崩壊し、価値観も多様化しているため、人びとは自己価値を測る価値基準が見いだせず、自己にとっての信頼できる価値基準の形成が困難であるため身近にいる他者の直接的な承認にすぎることになる。現代の社会においてかつて広く共有された社会的価値観は、科学の発展や個人化の過程でその影響力を失いつつある。社会共通の価値観がその信頼性を失ったとき、人びとは自己の価値判断の指標を失い、それに代わって身近に存在する他者の承認にその価値判断をゆだねることになるのである。このため現代社会においてはコミュニケーションによって身近な他者から与えられる承認に重きが置かれ、コミュニケーション能力が非常に大きな役割を果たすことになる。

以上述べてきたように、①人間関係が個人の心理的部分に依拠するようになったこと、②個人の価値判断の基準となっていた社会的価値観が力を弱めたことが現代において他者からの承認への不安を増幅させていることに大きく関係していることが伺える。これらを踏まえ、次章では承認への不安が増幅している現代において、現代に生きる若者に焦点をあて、「承認への不安」がどのように顕在化しているのか、友情関係とそのコミュニケーションの在り方などを検討しその問題点について考察する。

2. 承認不安と若者の現状

「若者」とは

ここから、現代に生きる若者に焦点を絞り、1章で述べたような社会的変化により承認不安がどのように顕在化しているのかを見ていく。初めに「若者」という概念について確認しておきたい。「若者」というワードは様々な場面で用いられ、その大まかな概念について

は広く理解されている一方、その定義について法律上で定められた定義や年齢区分は存在しない。厚生労働省の若年者雇用政策³において若年者とされるのは15歳から34歳、政府の青少年育成施策大綱⁴においては中学生からおおむね18歳までを指す思春期とおおむね18歳から30歳未満を指す青年期を合わせて「若者」という括りで示されており、その定義は様々である。しかし、古市（2011）が「現代日本で「若者」という言葉は多くの場合個人的な人物ではなくて、二〇代くらいの世代全体を指す用語として使われる。」（古市2011:19-20）と指摘するように日本において一般的に「若者」というワードを用いるときに想定されるのは10代から20代にかけての年齢層であることが多い。以上を踏まえ、本論では「若者」について明確な年齢区分、定義づけは行わず、現代日本において一般的に「若者」と総称される年代（10代～20代、思春期を含む）を「若者」と呼ぶことにする。

現代では「若者論」というワードも広く知られ、様々な側面から「若者」を対象とした研究、分析が行われており、「若者世代」の不幸を懸念する声も多くある中でその当事者側ではその実態を異にする様子も伺える。たとえば、内閣府の「国民生活に関する世論調査」は、18歳から29歳の現在の生活への満足は79.5%にもものぼり、他のどの年代よりも現在の生活へ満足している割合が高い。⁵また、内閣府の国民生活選好度の調査では「幸福度を判断する際、重視した事項」について「友人関係」と答えていた割合は男性では15歳～19歳69%、20歳～24歳52.4%、女性では15歳～19歳73.3%、20歳～24歳64.1%となっており、各年齢層でそれぞれ一位、二位を占めている。⁶これは他の世代に比べても突出して高い数値となっており、ここからは若者の幸福度において「友人関係」が非常に大きい比重をもつことが伺える。このように若者にとっての幸福度を大きく左右すると考えられる「友人関係」は現在、どのような様相を帯びているのだろうか。

2. 1 若者の友人関係

2. 1. 1 友人関係の形成と維持

まず、学校内でみられる思春期の友情関係を中心に現在の若者の友人関係がどのように生まれ、維持されているのかまとめていく。現代における多くの友人関係は「当事者によって選択され、かつ『親密』なものとなる対人関係」（加藤 2014:109）であり、前述した後

³ 厚生労働省「青少年雇用対策基本方針」（平成28年厚生労働省告示第4号）

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11600000-Shokugyouanteikyoku/0000135637.pdf>

⁴ 青少年育成施策大綱の概要

http://www.kantei.go.jp/jp/singi/seisyonen/031209taiko_s.pdf

⁵ 国民生活に関する世論調査 内閣府

<https://survey.gov-online.go.jp/h29/h29-life/zh/z02-1.html>

⁶ 国民生活選好度の調査 内閣府

<http://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/shiryoku/2shiryoku/2.pdf>

期近代における新たな人間関係の在り方と一致する。また山竹（2011）が指摘するように友人関係は共有された価値観が最初から曖昧かつ流動的であり、その都度の状況ごとに相手が好む行為かどうか、仲間が共感してくれる行為かどうか、承認を維持する上で重要になる。つまり友情関係においてはその大部分が第一章でみてきた個人の意思選択によって構成される関係性であり、その構築、維持には関係性における相互の承認や満足感が必要不可欠となる。

現代社会における親密性の変容についてはさまざまな社会学者がその変遷について述べているが、山竹（2011）はかつて親密であることは「ぶつかり合い、わかりあうこと」によって達成された一方で現代における親密な関係は多くの場合「互いに気をつかいあうこと」、相手を「傷つけないこと」によって成立していると指摘する。このような現代の若者の友人関係について土井（2008）は他人と積極的に関わることで相手を傷つけてしまうかもしれないことを危惧する今風の「優しさ」の現れとし、対立の回避を最優先にすることで成立する『優しい関係』と呼んでいる。また、山竹（2011）も同様に仲間の承認を得るために自分の本音（ありのままの自分）を抑え、仲間の言動に同調した態度をとり続ける若者のコミュニケーションを指摘した上で、その内実は場の空気に左右される中身のない承認であると分析し、このようなコミュニケーションを「空虚な承認ゲーム」と呼んでいる。現代における若者の友人関係においてはその親密性を保持するためにありのままの本音でぶつかりあうことで互いの深い部分を理解しあうことよりも、場の空気や相手の心的部分への配慮が優先されるのである。ほとんどの友情関係においてはその形成、維持がなされるか否かが相互の承認や満足感に依拠するため、相手に「気に入られる」こと、「空気を読む」ことは関係の形成、維持の過程において非常に重要な要素となる。常に周囲に気を配り場の空気を読み取り、自分の取るべき態度を瞬時に察知することで、互いにぶつかり合うことを極力避けたがるような空気感が、若者のコミュニケーションの中には垣間見える。深谷（1998）によれば、中学生を対象にした調査において「いつも友人と同じ行動をとり、一人だけ目立った行動をしないように心がけている」生徒は、調査対象者の八割、「授業中、答えが分かっている、みんなが分からないときは分からないふりをする」生徒は、七割を超えるという結果が明らかになった。ここからは自己よりも他者への意識が強く、個人の行動指針として他者からの視線や承認が最優先されている様子が伺える。このように現代の若者の友人関係の構築や維持、円滑なコミュニケーションを可能にするため、他者への同調、場の空気を読むといった行為は当たり前のこととして、また友人関係の構築・維持において必要不可欠なこととして認識されている。

2. 1. 2 対人評価軸としてのコミュニケーション能力

このように関係性の構築、維持において常に互いの心的部分の読み取りが必要とされるなかで若者にとってコミュニケーション能力は非常に大きな影響力をもつことになる。相手の心情を察知すること、場の空気を読み取り、そのうえで自分のとるべき適切な態度、言

動をとれることは他者との関係維持において必要不可欠な能力となるからだ。

また、萱野（2008）によれば現代社会は社会そのものがコミュニケーション重視型の社会へと移行しており、私生活のみでなく仕事においてもコミュニケーション能力が要求され、他者から受けいれられたり、承認されたり、あるいはさらに言えば他者と楽しくすごすことができる、といったことが人々の存在価値において大きなウェイトを占めるようになった。仕事において各々の場面や対話する相手の感情に合わせ臨機応変に人間関係を築いていく能力が重要視されるようになったために、将来の職業生活の保障のため教育現場においてもこういった能力の助長が推し進められる。これについて土井（2008）は、いろいろな交渉事をスムーズに進め、場の空気を敏感に読み取って迅速に対応できるような対人関係の能力が問われるようになっており、人間としての評価もまた、このような対人能力の有無によって左右されると指摘し、斎藤（2013）も同様に、「いまや子どもたちの対人評価軸は、勉強でもスポーツでもなく、「コミュ力」に一元化されつつある。」と指摘する。友人関係においてその関係の維持のため、相手の承認を丁寧な配慮を必要とするコミュニケーションによって確保する必要があるのみでなく、人間としての評価軸としてコミュニケーション能力が重視されるようになったために、対人評価として与えられる承認の獲得においてもコミュニケーション能力が必要とされているのである。

個々の場面でそれぞれにふさわしい関係構築を可能にするコミュニケーション能力は若者の友人関係においてのみでなく、職業生活においても重要な能力とされ、新卒採用の評価軸としてコミュニケーション能力を求める企業も多々見られる。つまり現代の社会においてコミュニケーション能力は思春期にあたる若者の友人関係においてのみでなく社会的に求められており、それはいまや人間としての評価を判断するものさしとして用いられている。しかし、これは一方でコミュニケーションを苦手とする人々がコミュニケーション能力に長ける人々と比較していくらかの困難を経験することも意味する。

2. 1. 3 ひきおこされる問題

現代になってその数の増大に着目され、現代社会における若者の問題として語られることが多い「ひきこもり」も、コミュニケーション能力がその人間の評価軸として用いられるようになってきたことに起因すると考えることができる。内閣府の「若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）」ではひきこもるきっかけとなったできごとについて、病気による必然的な理由を除けば、職場、学校になじめない、または人間関係がうまくいかなかったというような自己と周囲との関係性の不適合によるものが大多数を占めている。また、ひきこもりの状況にある人々は、一般群と比較して対人関係において苦手意識が高いことも明らかになっている。⁷また、調査に対するコメントとして高塚（2010）は現代社会が人間関係やその軸となるコミュニケーション力に重きを置きすぎているために「無口で

⁷ 「若者の意識に関する実態調査（ひきこもりに関する実態調査）」内閣府
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf/gaiyo.pdf>

はあるが自分の考えをしっかりと有している人間」や「言葉に頼らず人の気持ちを「察する」能力を高く持っている」人間が評価されず、こうした現代社会における価値観の進行が「ひきこもり」になる若者たちにとって生きにくい社会になっていると指摘している。現代ではコミュニケーション能力が重視されすぎているがゆえにその他の点で承認が得られにくくなっているのである。

また、土井（2008）は、ひきこもりになる理由は人それぞれ様々に異なるとしても、一度ひきこもりになった者が社会へ再出発する際の敷居の高さはみな一様であり、この問題の最も深刻な部分はこの社会に出たい気持ちがあってもなかなか出ていくことができない社会側にあると指摘した上で、ひきこもりの青年たちが感じる社会の敷居の高さとは、外の世界で彼らを待ち構えている人間関係のキツさであると述べている。この人間関係のキツさとは互いの意思のぶつかりあいで起こる葛藤のキツさではなく、衝突を避けるために過剰に相互の心的部分への配慮を必要とするキツさを意味しており、土井（2008）はこれを「コミュニケーションへ過剰に没入せざるをえない今日の人間関係に対する反動であり、そのネガティブな投影でもある。」と結論付ける。

コミュニケーション能力は関係の形成、維持に関して他者の承認なくしてはそれがなされない状況において、承認を得るための必要不可欠な能力であると考えられるが、それは一方で人間としての評価軸としても用いられるようになりつつあることで、承認の分配の問題にもつながっている。また現代におけるコミュニケーションは過剰な気の遣い合い、配慮によって成立しているため人びとをこれに没入させてしまう危険性を孕み、結果的に疲弊させてしまう可能性がある。

2. 2 承認の対象の狭小化

これまで見てきたように若者の友人関係やコミュニケーションの在り方に承認への不安を読み取ることができるが、もう一点、若者の承認にまつわる諸相として承認の対象の狭小化が起こっている。たとえば、コミュニケーション力を駆使しながら相互の意思選択や満足感、承認の獲得によって形成される友人関係に、小学校や中学校において生徒たちが「グループ化」する要因も見出すことができる。土井（2008）によれば「優しい関係」を取り結ぶ人々は、自分の身近にいる他人の言動に対して、つねに敏感でなければならない。そのため「優しい関係」は、親密な人間関係が成立する範囲を狭め、他の人間関係への乗り換えも困難にさせる。互いに相手の心的部分に対する感覚を研ぎ澄ませ、相互の求める適切な対応を常時心掛けてコミュニケーションを行うことでようやく維持されることが可能になる関係の下では、その神経を身近な人びととの関係性に常に傾注している必要があるためだ。

思春期におけるクラス内での友人関係におけるグループ化現象はいわゆる「スクール・カースト」と呼ばれるクラス内での身分制度にも通ずる。思春期における友人関係では「格が違う」とか「身分が違う」などと形容して、グループ相互の上下関係に過剰なほど気をつか

いい、格や身分が違う人たちのグループとは、それが下である場合だけでなく、上である場合でも、なるべく交友関係を避けようとし、彼らが自分の所属するグループ以外に所属する人びとを友人の対象として見ない。(土井 2008)先述したように若者にとっての対人評価軸はコミュニケーション能力に一元化されつつあるため、このスクール・カーストの序列もコミュニケーション能力に基づいて決定され、厳しくグループ化されたクラス内でそれぞれのグループは孤島のごとく存在し、グループ同士での交流はあまり見られない。このために、生活のほとんどが家庭と学校の行き来で成り立つ思春期の若者にとって自分の所属するグループだけが世界のすべてという感覚をもたらし、そこでうまくやっていけなくなった時、逃げ道は存在しないように感じてしまう。その結果自らが所属するグループからの排除を恐れ、過剰なほどの気の遣い合い、同調によってその関係性の維持に努めなければならなくなるのである。

この一方で現代の思春期における友人関係では、意図的に関係の拡大を阻止している様子も伺える。いわゆるスクール・カーストのような現象には、関係を築く主体となる本人が意図的に身近な人々のなかに線引きをし、交友関係の拡大を妨げている場合がある。そうして線引きをした外側の人間は、たとえ同じクラスにいても自分とは関係のない他者であり、承認を求める他者には該当しない。また、これらの傾向は思春期のみでなく若い世代を中心にみられる現象であり、多くの人は思春期を終えて大学生や社会人になっても、身近な人々の直接的な承認にこだわる点では変わりなく、承認の対象を見知らぬ他者へ広げようという姿勢があまり見られないという。自らの周囲の人々にのみ承認を求め、それ以外の人々は無関係とするような考え方は現代の若者に多く見られる現象であるが、それは非常に危険な要素を孕む。山竹(2011)はこのような考え方を「見知らぬ他者の排除」としてその問題点を指摘しており、冒頭で取り上げた秋葉原無差別殺傷事件もこの「見知らぬ他者の排除」がもたらす危険を示す一つの代表例と考えられる。事件の原因が「承認」の不満足にあるという議論がとびかう要因となった掲示板では、自らの存在のアピールを目的としたような書き込みが多く見られたが、その書き込みに対する反応は少なく、承認への欲望は満たされることがなかったという。(芹沢ほか 2011)彼が欲する承認は自らの周りにいる顔見知りの他者と、ネット上での他者から与えられるものであり、その承認への欲求が満たされることがなかったために、無差別に人を殺めることとなった。これについて山竹は「人と関わりすぎると怨恨で殺すし、孤独だと無差別で殺すし 難しいね」という彼の掲示板への書き込みから、「彼にとって見知らぬ人々は、自分を承認してくれる他者ではないし、承認してほしい対象でもなかった。あえて言えば、この世にいなくても構わない存在だったのである。」(山竹 2011:19)と分析する。自分に承認を与えてくれる、もしくは承認を得たいと考える他者以外は承認を与えてくれる存在でも、承認を得たい相手でもないために自分とは無関係であり、「どうでもいい」存在として存在するのである。このように自分にとって身近な他者から与えられる承認へ過剰に固執する半面、その他の他者を承認の対象として捉えないうえに、ないがしろにしてしまう傾向は若い世代を中心に多く見られるが、このような

考え方はその他大勢の他者の存在を考慮しない点で大きな危険性がある。

2. 3 SNS と承認不安

若者を取りまく承認不安の諸相は友人関係やそのコミュニケーションの在り方に表れているが、古市（2011）が指摘するように現代その影響力を肥大化させているインターネットによって現代社会において承認欲求を満たすツールは無数に用意されている。Twitter や Face book、You tube に代表されるソーシャルメディアの普及により、個人が自己の意思によって発信者となることができ、各々のサービスにはそれぞれの投稿に対して他者から与えられる「いいね」「お気に入り」などの機能があるため、自己の情報の共有に対して他者からの反応を期待することができる。古市（2011）によれば、こうしたソーシャルメディアを通して無名の個人は「小さな有名人」になることができ、そうしたツールは格好の承認の供給源となる。つまるところこれらの機能は他者からの承認とニアイコールの意味合いを持っているのである。

最近では「インスタ映え」というワードがニュースでも取り上げられる。その意味について明確な定義は存在しないが一般的に「インスタグラムというパソコン、スマートフォン向けの写真を投稿し、共有するサービスにおいて、投稿した写真が映える、見栄えがいい」といったような意味合いで使用されている。「インスタ映え」する写真を撮るため、若者は東奔西走し、その写真を投稿することで多くの人から「いいね」を押してもらえる可能性が高まり、承認への欲望が満たされることへとつながるのである。また、最近ではこういった SNS の広まりから、リア充アピール代行サービスというものも存在する。SNS に写真をアップすることを目的として自分が望むシチュエーションを設定し、友人または恋人などを演じてもらい、一緒に楽しんだり写真を撮ったりすることができるというサービスであり、年齢や容姿などの細かな指定も可能で人数、時間によって値段が変動する。サービスを提供する会社のホームページには利用者の声が寄せられ、「沢山自慢写真が取れました・・・Facebook と Twitter にもいい写真がアップできました。」「インスタグラムとブログにいい記事が書けたし、『いいね』もコメントももらえたので嬉しかったです。」などの掲載があり、利用者は実際に SNS 上でのアピールを目的にこのサービスを使用していることがわかる。⁸ こういったサービスを利用する人の数は未だ少数であるとはいえ、ここからは SNS 上での承認欲求の充足のため奔走する人々の存在がわかりやすく浮かびあがる。このように SNS は現代に生きる人びとにとっての承認の供給源となっていることが伺える一方で別の面からも人びとの承認への欲望に影響を与えていると考えられる。

SNS は自己の情報の共有に対して他者からの反応が得られることで、他者からの承認が数値化、可視化され、承認への欲求を手軽に満たせる手段として有効である一方、より一層承

⁸ リア充アピール代行サービス「ファミリーロマンス」ホームページ
<http://family-romance.com/service/realappeal.html>

承認不安を掻き立てる要因にもなる。自己の投稿に対して他者から多くの反応が寄せられれば、承認への欲望が満たされることにつながるが、期待した通りの反応が得られなければ承認不安が生じることにもつながりうるのである。また、承認が可視化されていることで他人との比較が可能になり、より一層の承認不安を生じさせる可能性もある。以上のことを踏まえ、現代では承認への欲望を解消するソーシャルメディアを通じたツールが無数に用意されている反面、それらは逆転的な効果をもたらす可能性もあることから、抜本的な処置とはならない。更にこういった SNS を通して与えられる承認によって可能となる承認への欲望、不安の解消は一時的なものであり、最近では SNS 映えを求めすぎるがゆえに、対象物の本質的な利用目的を見失った若者の行動なども問題化しており、承認不安の根本的な緩和策として有効であるとは捉え難い。

3. 承認不安と向き合うために

3. 1 承認不安を乗り越える

承認への欲望は現代の人びとに特有な欲望ではない。人間に備わる基本的な欲望であるにも関わらず、現代において特に人々の承認への欲望、不安が着目されるようになった要因は現代特有の承認への不安を増幅させる社会の側にあることが伺える。人間関係の構築や維持において相互の承認が求められること、社会的に普遍的な価値観への信頼が揺らぐことによって行動指針となっていた価値観を失い、身近な人びとからの承認が大きな影響力をもつようになったことで、人びとは生活のなかで無意識にも他者の承認に頓着するようになってきている。こういった中で若者の友人関係はより一層互いの心理的部分に傾注しながら構築、維持されるようになり、注意深く気を配りあいながら、コミュニケーションが図られている。また、コミュニケーション能力が対人評価軸として用いられる傾向も見られ、承認とコミュニケーションのつながりはますます強まってきている。更に承認欲求を満たす、または承認への不安の緩和のため SNS やその他サービスが利用されている一方でそれらは根本的な解決策としては考えられにくい。現代の人びとが抱える承認への欲望、不安はいかにして解消可能なのだろうか。

第一章で現代社会において承認不安が生じる原因として「人間関係の選択化」と「価値観の多様化」を取り上げた。人間関係の選択化によって生じることとなった承認不安は、つまるところ「他者からの承認がなければ関係の構築ができない、または維持が困難になる」ことに対する不安から生じている。他方価値観の多様化に起因する承認不安は社会共通の価値観の喪失によって他者に認められるための行動の価値基準が失われ、その代替として身近な他者の承認がその役割を果たすようになったために、「他者からの承認」への不安が増

大することとなった。両者はその不安が「他者からの承認」に頓着していることに起因する点で共通している。つまり「他者からの承認」に依存しすぎることなく日常を過ごすことが承認不安の緩和、解消につながると考えられる。他者からの承認に依存しすぎないこと、それはつまり、人間関係においては「選ばれる自己」ではなく「選び取る側」の自己という感覚、価値観の多様化においては自分の価値判断の基準となる軸の獲得を意味する。

人間関係における承認不安の緩和

人間関係が選択的に形成されるようになった現代、言い換えれば人びとは人間関係における「自由」を獲得した。伝統的なつながりからの解放を経て獲得された人間関係における自由は、人びとを「わずらわしい人間関係」からの解放と「自らが望む関係」の構築を可能にしたのである。それは、お互いにとってその関係によって満足できる、理想的な、自らが求めた人間関係である。現代ではインターネットの普及も相まって、コミュニケーションのツールは多様化し、人びとが自らの「つながりたい」他者を求め、探し、つながることが可能な場が無数に用意されている。人びとは「生活の必要性」に迫られて半強制的に構築される人間関係の解放を受け、自らの意思選択で、その時々目的に応じて、人間関係の構築が可能なのである。Beckのいう第二の近代における個人化による人間関係の変化は人びとに様々なプラスの影響を及ぼした。他者の承認に依存することとなるのはその変化の一環として必然的に起こりうるものであり、ひとつの弊害でもある。

しかし、少なくともこの社会的変化によって人びとは様々な恩恵を受けており、現代生じている承認不安がこの変化によるものであることを前提に、個人化が進行する前の、半ば強制的に関係が構築される社会、生活に戻ることによって承認不安が解消されるわけでもない、戻ることが可能なわけでもない。関係の選択化した社会において、必然的に生じることとなる承認不安と向き合っていくことが現代に生きる人びとには求められている。

「他者からの承認」なくして関係の構築、維持がスムーズになされない状況において他者からの承認を得られないことに対して不安が生じるのは、コミュニケーション力を重視する傾向がある現代の日本社会においては特に、当然のことと考えられる。「他者の選択」によって「選択」されなければ、自らが望んでいてもその関係構築、維持が滞りなくなされることは考えにくい。しかし、人間関係が選択化された社会においては他者が人間関係を選択する主体であると同様に、自らも「選択する主体」であることを忘れてはならない。人びとはそれぞれ「選ばれる」主体であると同時に「選び取る」主体でもあるのである。若い世代においては日々の活動範囲のせまきから、自らの周囲にいる身近な他者がすべてという感覚に陥りやすい。身近な他者に与えられる承認に依拠することでそのコミュニケーションは空虚なものになってしまう。しかし、先述したように、現代ではコミュニケーションツールの多様化にともない、人びとのつながりを可能にする媒体は無数に存在しており、空間にとらわれることなく関係の構築、維持を可能にする。それらコミュニケーションツールはつながりを形成するにあたって人びとに大きな可能性をもたらす。各々の目的や必要性に

準じてその関係性の構築が可能であり個人の選択によってその関係性の範囲は無数に広がるのである。

人間関係が相互の意思選択によって形成されるものとなった以上、相手方の承認を求め生じる不安の完全な解消は不可能である。しかし、このような現代の社会における人間関係の在り方を把握したうえで、自らの立場を客観視し、自らが関係を意思選択する主体であることを認識することは、関係の構築、維持において「他者からの承認」への依存状態からの脱却を可能にする。受動的態度でなく、主体的に人間関係を捉えることは現代の人間関係の在り方に起因して生じる承認不安を緩和する一つの方策となるだろう。

価値観の多様化による承認不安の緩和

価値観の多様化による承認不安の増幅は承認を得るための自己の行動指針となる価値基準の喪失に由来する。社会的価値観への信頼がゆらぎ、代わって身近な周囲の他者からの承認に依拠してしまうため、相手方の承認を得るためだけのコミュニケーションに没入しやすくなる。ここに「他者からの承認」への依存が生じ承認への不安が募ることになる。この社会的価値観の失墜により生じる承認不安の緩和に有効な方法として山竹（2011）は「一般的他者の視点」の認識を提示する。

山竹（2011）は他者から与えられる承認を「親和的承認」「集团的承認」「一般的承認」の三つに分類する。「親和的承認」とは家族や恋人、親しい友人など親和的他者から与えられる承認であり、人びとにとって憧れであり最も欲する承認である一方で自らの努力のみではどうにもできない側面を持つ。「集团的承認」とは自らの所属する集団の中で求められる役割をこなすなど、集団の人間が評価する行為を示し、その行為の価値を集団の成員（集团的他者）から認められることによって与えられる承認であり、親和的承認に比べて自己の努力によって得られる可能性の高い承認である。「一般的承認」はこれらと比較してより一般性、普遍性のある価値を基準として与えられる承認である。「一般的承認」は不特定多数の多数の他者一般（＝一般的他者）から与えられるもので、学問的知識や優れた技能、道徳的行為などその価値が社会全般にわたって認められるような行為、知識、技能を対象として与えられる。たとえば困っている人を助ける行為、ボランティア活動への参加などは社会的立場や価値観が異なる人びとであってもそれらが「善いこと」であるという認識は共通して存在する。こういった行為は社会共通で「善」の認識があり、人びとはその行為について社会的承認が得られることを内省的に認識しているため、身近な他者の承認を必要としない。この場合、人びとは自らの内面に想定される不特定な他者からの承認を前提に自らの行為の価値判断を行う。このように「一般的承認」を与える一般的他者とは「見知らぬ大勢の人間を含む不特定多数の人々」であり「顔の見えない抽象的な他者一般の像」（山竹 2011）として現れる。人びとが自分の行動や考え方における価値や正当性に迷いが生じたとき、他の人はどう思うだろうか、と考えその判断基準として用いる内面化された他者の存在がこれである。人はこの一般的他者による承認が得られることが確信できる行為であれば、自信をもって

行為を遂行することができるのである。この内面化された他者の視点を獲得することは人びとにとって承認不安を緩和する大きな手立てとなる可能性に満ちている。逆にいえばこの内面化された他者の視点の欠乏こそが、現代社会における承認不安をかきたてる要素となっているからである。

この「一般的他者の視点」は様々な他者との関わり合いの中で、多様な価値観に触れ、他者から承認されたり、非難されたりすることを経験していくことで獲得される。つまり様々な人びととの関わりを通してより多くの価値観を知り、それらを平等に自らの内部に取り込むことが必要となる。思春期を含む若い世代はまだこの一般的他者の視点の獲得の過程にあり、多種多様な価値観を吸収し自らのものにしていく期間にあたる。そのため若者には必然的に承認不安が生じやすい。

現代の若者が抱える承認不安はこの一般的他者の視点が未熟であることが原因となっていることが考えられ、根本的な解決のためには時間をかけて様々な価値観を自らの内面に取り入れていくことが求められるため、一般的他者の視点の獲得は承認不安を緩和する方法として即効性は有さない。つまり、この一般的他者の視点が自己に安定性をもたらすほどに成熟するまでには多くの時間を要するため、その間周囲の身近な人々の承認に依存することになる。互いの承認を得るために同調しあうような、気の遣いあいによって成り立っている若者の友人関係におけるコミュニケーションはこの「一般的他者の視点」の獲得のために必要な過程であり、それが未熟な若者にとって必然的に生じるコミュニケーションのあり方であるともいえる。

自らの居場所として安心できるコミュニティの確保や他者からの承認を得るためのスキルの習得も承認不安を緩和する方法の一つとして有効であると考えられるが、価値観の多様化が広がる現代社会において承認にまつわる不安に対する根本的な解決策としてこの不特定多数の他者の視点を認識することは最も有効な方法であると考えられる。多様な価値観が混ざり合い、相対化されて混在する社会において、自己の価値基準の指標として他者の承認に依拠することで承認への不安が生じる。こうした承認不安の緩和においては「他者からの承認」に依存することなく自己の価値基準を保持することが求められる。様々な価値観が入り混じる現代社会であるからこそ、自己の価値観、身近な他者の価値観、見知らぬ不特定多数の他者の価値観がそれぞれ絶対的価値観でないことを認識したうえで、より多くの価値観を自分自身に取り込むことによって身近な他者の承認に依存しすぎることなく自己の軸となる価値観の形成が可能になるのだ。

人間関係の変化、価値観の多様化、いずれにしても人びとは「他者からの承認」に重点をおいていることが承認への不安につながっている。個人単位でのライフユースの設計が可能となり、あらゆる面で選択の自由が獲得された現代において、「他者からの承認」に依拠することなく、自分自身に目を向け物事を主体的に捉える姿勢の獲得が承認不安の緩和とそれに伴うより豊かな人生へとつながるのではないだろうか。

おわりに

前々から興味をもっていた「承認欲求」や「承認不安」について深く考えてみたいと思ったのが発端となり本論ではこのテーマを設定した。近代化のなかで資本主義の発達やグローバル化など様々な変化によって人びとは個人単位での生活が可能になり、あらゆる側面で選択、決定の自由を獲得したとともにそれはまたいくつかの新たな問題を生み出した。承認への不安はこの変化による一つの産物であり、人びとはこれを受け入れ、向き合っていかなければならない。現代、人間関係の選択化や価値観の多様化、コミュニケーション能力重視の社会であることなどが相まって人びとは身近な他者の承認に依存しがちである。承認不安の緩和のためにはこの他者からの承認への依存状態からの脱却が目指され、そのためには自己を中心に据え主体的に捉え直すことが求められている。

残された課題としては、本論では承認不安を拡大する要因を社会の側に見出す形で述べたが、現代大きな問題とされている格差社会と承認のつながりについて触れることができなかった。経済的格差は承認の分配の問題にもつながり、承認格差（萱野 2008）をもたらす。日本社会は一億総中流といわれる一方で格差問題は深刻化しており、承認の問題を考えるにあたって格差社会との結びつきは根強いものと考えられる。

承認にまつわる問題は心理的なものであり目に見えない点からしても、その問題の大きさは捉えにくい。現代社会が承認を得られにくい社会であることが広く認識されることはあっても、その解消の手立てとなるものが講じられることは困難であると考えられる。それでも、承認への不安や不満足から日々の生活におけるわずらわしきや社会問題が引き起こされることを考えれば、その変化がわずかであったとしても承認への不安に対してその緩和を目指し考えをめぐらすことには意義があると思う。

参考・引用参考文献

- Ulrich Beck, 1986, "Risikogesellschaft : Auf dem Weg in eine andere Moderne"
Frankfurt am Main : Suhrkamp (=1998 東廉ほか訳『危険社会』法政大学出版局)
- 鈴木宗徳, 2015, 「ベック理論とゼロ年代の社会変動」
- 伊藤美登里, 2015, 「社会学史における個人と社会」,
- 石田光規, 2015, 「資本主義システムにおける人間関係の外部性」
- 鈴木宗徳編著『個人化するリスクと社会—ベック理論と現代日本』勁草書房
- 加藤篤志, 2014, 「若者の〈つながり〉をどう考えるか—若者の友人関係に関する研究を手がかりにして」長田攻一・田所承己編著, 『〈つながる／〉つながらない〉の社会学—個人化する時代のコミュニティのかたち』弘文堂
- 斎藤環, 2013, 「承認をめぐる病」筑摩新書
- 芹沢俊介、高岡健, 2011, 「「孤独」から考える秋葉原無差別殺傷事件」
- Deborah Chambers, 2006, "New Social Ties Contemporary Connections in a Fragmented Society", New York : Palgrave Macmillan (=2015 辻大介ほか訳『友情化する社会 断片化のなかの新たな〈つながり〉』岩波書店)
- 土井隆義, 2004, 「個性を煽られるこども」岩波書店
- 土井隆義, 2008, 「友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル」ちくま新書
- 高塚雄介, 「臨床心理学の立場から—ひきこもる若者たちの心は・・・」平成22年「若者の意識に関する調査（引きこもりに関する実態調査）報告書」, 内閣府
- 深谷昌志, 1998, 「閉じ込められ疲れている中学生」『論座』三七号, 朝日新聞社
- 古市憲寿, 2011, 「絶望の国の幸福な若者たち」講談社
- 萱野稔人, 2008, 「「承認格差」を生きる若者たち」文春新書編集部編『論者 若者論』文春新書
- Maslow, Abraham, 1970, "Motivation and personality" New York: Harper & Row (=1971, 小口忠彦監訳『人間性の心理学』産業能率大学出版部)
- 山竹伸二, 2011, 「「認められたい」の正体 承認不安の時代」講談社現代新書

